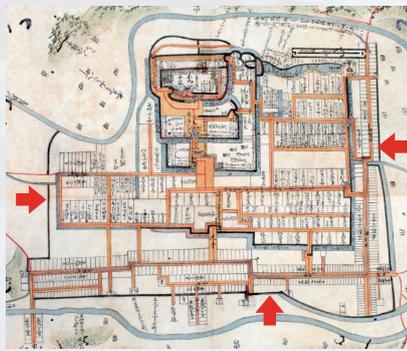


小峰城よもやま話

第六話
南側を防御する
小峰城の時代

小峰城は、丹羽長重が土墨の城から石垣を多用した城郭に大改修しました。特に城郭北側の防御を重視していますが、これは北東北の外様大名に備えた「奥州の押さえ」として、江戸防衛ラインの一拠点に位置付けられていたためと考えられます。しかし、いつの時代も北側の防御が重視されていたわけではありませんでした。

現在発見されている小峰城の絵図に、丹羽長重の改修以前とみられる絵図があります(左図)。丹羽家の前、会津領主蒲生家の時代(1601~1624)の様子と考えられます。この絵図を見ると、城下町の東側・西側・南側をぐるりと囲む「土墨」(赤色の矢印)がみえます。この土墨は、城郭と城下町を一体で防御する「惣構」と考え



▲白河城之図 (部分)(宮城県図書館蔵)

られ、この時期の小峰城の特徴とみられます。加えて、惣構の方向から考えると、南側の守りを重視していたようです。なぜ江戸時代とは逆方向なのでしょう。これは蒲生家の領地を考えると分かります。この時代、白河は蒲生家の領地の南端にあたるため、領内側の北でなく、領地の外と接する南側の守りを重視したと考えられます(左図)。



▲蒲生家の領地(60万石)と城郭・主要道

その後、蒲生家が領地を没収されて白河藩が成立すると、小峰城は「奥州の押さえ」として、今度は北側の防御が重視されるようになります。このように、小峰城は大名の支城として領地を守るための城から、大名の居城として幕府の戦略上重要な城として位置付けられ、より大きな役割を果たすようになったといえるでしょう。

文化財課 ☎2310

白河、あの頃と今

今月のテーマ「白河提灯まつり」

Vol. 1



市内の様子や行事などを写した古写真の中から、テーマに沿った1枚を紹介し、現在の様子と比較します。タイムスリップ気分を味わいながら、白河の魅力を再発見しませんか? 本庁舎秘書広報課 内2171



【昭和49年の様子】

約360年にわたり、世代をこえて受け継がれてきた伝統の行事。大きな見どころのひとつが、阿武隈川の渡河です。今から46年前に行われた時は、川が深く、流れが急だった様子が写真からうかがえます。



【平成30年の様子】

阿武隈川を力強く渡る姿と、提灯の明かりが醸し出す幻想的な雰囲気。後ろに写る橋を渡る提灯の明かりも、かすかに見えます。伝統が、現在にもしっかりと受け継がれていることを感じる一枚です。

お知らせ
ラウンジ
りざらん
シリーズ
子育て
保健
くらしの情報館
手話
高齢者サロン
休日当番医・無料相談ほか
市長の手控え帖